

曖昧さ及び、曖昧さに対する耐性—非耐性の再考

Re-examination of Ambiguity and Tolerance/Intolerance to Ambiguity

神 田 信 彦*

Nobuhiko KANDA

要旨：本研究は、曖昧さ (ambiguity) についての Frenkel-Brunswik (1948, 1949) の考え方と、Ellsberg (1961) や Budner (1962) 等との定義の比較検討を行い、「多義性」を曖昧さの本質とみなし再定義を試みた。次に脅威に代え、居心地の悪さ・不快感を導入することによって、曖昧さに対する耐性—非耐性のさらなる一般化を提案した。また従来は、曖昧さを人々が一律に曖昧と認知しているという前提で研究が進められることが多かったと考えられたため、ある対象や状況を曖昧であると認知する個人差についても言及した。これらから曖昧さに対する非耐性に2つのタイプがある可能性を示唆した。さらに、曖昧さに対する耐性—非耐性を情報処理の仕方から検討することを提案した。

キーワード：曖昧さ, 曖昧さに対する耐性—非耐性, 多義性

問 題

本稿の目的は、曖昧さ (ambiguity) と曖昧さにたいする耐性—非耐性について再検討を試みることである。

日々、私たちはさまざまな刺激や情報に晒され、それらに積極的に関わることも多い。また、それらの刺激や情報を私たちが知覚し判断し、反応する際には、それらは時には質・量ともに豊富であり、別の時には不足であることもある。それらがどのような刺激や情報であれ、私たちはそれらを私たちの経験に照らして納得のいく形で整理し理解しようとする傾向を持っているようである。

意識レベルでは、私たちは自分にとって意味があったり、なんらかの興味をひく刺激や情報に注意を向け、一般的には判断過程を経て反応や行動を行う。しかし、容易に判断できずに反応や行動を起こせない場合もある。そうしたことを引き起こす要因の一つに刺激や情報の“曖昧さ (ambiguity)” の要因がある。その場合、私たちは、その“曖昧さ”に居心地の悪さや不快感を

* かねだ のぶひこ 文教大学人間科学部

感じることもある。このように私たちは、“曖昧さ”という言葉には、どちらかといえば否定的な印象を持つことが多いであろう。それは私たちが“曖昧”なものに接する側、つまり受け取る側に立ったときである。上に述べたように、何かを判断したり、対応しなければならないときにそれらを適切に行えない可能性があるためであろう。その一方で、私たちはことに当たり“曖昧さ”を使うことがある。例えば、何かについての意見や態度を“曖昧”にすることがある。その方が少なくとも短期的には自分が不利にならないと考えるからであろう。

本稿では前者、曖昧な刺激に晒される立場からの検討を行う。さらに以下の前提に立って検討を進める。私たち人間が、それにさらされたり、積極的に接触する刺激や情報を自分の持っているものの見方の枠組みや、ときにはその背景となる考えや、価値観などに適合するようにそれらを理解しようとする。

心理学領域における曖昧さにかかわる研究

心理学領域において曖昧さに関する研究は2つの流れがある。一つは曖昧図形（多義図形）の知覚に関する研究であり、一つは、曖昧さに対する耐性と非耐性に関する研究である。本稿では後者を対象として検討を進めていく。

曖昧さに対する耐性の欠如（非耐性）の研究は、Frenkel-Brunswik（1948, 1949）が、偏見等とかかわる要因として指摘したことに始まる。

Furnham と Ribchester（1995）は、曖昧さに対する耐性—非耐性に関する研究をレビューし、あいまいさの耐性の低い人は、ストレスを経験し、早すぎる反応をし、曖昧な刺激を避けること、曖昧さに対する耐性の高い人は、曖昧な状況や刺激を望ましい、やりがいのある、興味深いものとして認識し、不一致の複雑さを否定しないことゆがめることがないものとしてまとめている。

曖昧さの定義について

Frenkel-Brunswik は、面接によって曖昧さに対する非耐性を導き出しているが、曖昧さを明確には定義していない。しかし1948年、1949年の論文では、感情の両価性を曖昧さと結びつけて捉え、知覚や認知における曖昧さとの関係を検討している。ここでの感情の両価性は、精神分析における両価的感情をより一般化し、どの人の中にも生じうるものとして考えられているようである。例えば、子どもが持つ、親に対する肯定的感情と否定的感情とが併存している状態である。両価性はここではある対象が相反する2つの感情的意味を持っていることであり、Frenkel-Brunswik は、1つの対象が2つの意味を持つ両義的なものとして曖昧さ（ambiguity）を採用したものと考えられる。

なお、ambiguity としての曖昧さは、『Oxford English Dictionary』では“the quality of having more than one possible meaning”とあり、他の英英辞典でも「あることが、考えられる意味を二つ以上持つためにはっきりしないこと」という意味として説明され、先の「両義性」よりも「多義性」や「多義的」であることによってそのものがはっきりしないことであるといえよう。

その後の曖昧さに関する定義を見ると、Ellsberg（1961）は、曖昧さを「状況を理解するために必要な情報や、考えられる結果の全てを割り出すための情報の欠落」、と定義している。Budner（1962）は、曖昧さを「十分な手がかりがないために、適切な構造化や分類ができない状態」と定義している。さらに Budner は曖昧さを作り出す刺激の特性として、新奇性（（既知の手がかりが全くない新奇な状況）、複雑性（考慮すべき手がかりが多すぎる複雑な状況）、不可

解性（個々の手がかりが異なる事態を指している矛盾した状況）の3つがあるとした。しかし、十分な手がかりがないこと”と複雑性の“考慮すべき手がかりが多すぎる”は不一致であり、“十分な手がかりがないこと”は“適切な情報がない”とすることが相応しい。

McLain (1993) は、曖昧さは、刺激や、それらの時間的または空間的相互関係を明確に理解するための不十分な情報の知覚を表わすものと考え、曖昧さについての前の2つの考え方を考慮し、曖昧な刺激には2種類あると述べている。一つは「新奇でなじみのない、予測できない、または複雑すぎて理解できないものとして認識される場合」、他は「複数の互換性のない解釈があると認識される場合」である。後者は、Frenkel-Brunswik の考え方である。前者は、Budner や Ellsberg に近い考え方であるが、Budner にはない将来の不確かさを加えている。

これら2種類の曖昧さは、異なっているようにみえるが、多義性あるいは多義的であるという枠組みだけでとらえることができると考えられる。例えば、新奇な刺激や状況がそれを目前にしている人にとって肯定的意味や結果を持つものであるのか、否定的意味や結果を持つものであるのか、あるいはどちらでもない中立的な意味や結果を持つものであるのか、と考えればその人にとって多義的であると言えよう。予測できない場合も複雑すぎる場合も同様に考えることが可能であろう。したがって、曖昧さとは「ある対象や状況が多義的であること、あるいは多義性を備えていること」と定義できる。

曖昧さを感じる個人差に関する問題

曖昧さに対する耐性—非耐性の研究では、曖昧なある対象や状況を誰もが一律に曖昧さを認知するとの前提で行われているように思われる。多くの人が曖昧であるとする対象や状況もあるだろう。一方、同じ対象や状況が、ある人にとっては曖昧であっても他の人にとっては曖昧ではないと認知されることもあるはずである。例えば、複雑な刺激について、ある人にとってはまさに曖昧であるが、そのことに精通している人であればそれは曖昧であるとは認知されないであろう。

ここで考慮しなければならないこととして、他の人が曖昧だと認知することを曖昧でないと認知する人は、曖昧さに対する耐性の高い人と曖昧さへの耐性の低い人両者が含まれる可能性があることである。後者は、例えば、目についた刺激特性や状況要因に注目し意味づけや解釈を行う場合が考えられるであろう。これは、曖昧さへの耐性の低い人にあると考えられる他の反応パターンや行動傾向の有無で区別することが可能であると考えられる。また、同じ対象や状態に曖昧さを認知しても、認知される曖昧さの程度にも個人差が存在する可能性が大きい。

曖昧さに対する耐性—非耐性の背景因や定義

Frenkel-Brunswik (1949) と Budner (1962) の曖昧さに対する捉え方は違ったのであるが、両者とも曖昧さに対する耐性の欠如には、曖昧さに対する脅威が背景にあるとしている。Frenkel-Brunswik は、精神分析の両面的感情をもとに子どもの両親に対する肯定的感情と否定的感情を抱くことはあるタイプの養育環境やしつけの中で育つ場合は脅威になると、さらにその根拠を述べている。

Budner も、曖昧さへの非耐性の背景には曖昧さに対する脅威があると考え、曖昧さに対する非耐性を「曖昧な事態を脅威として知覚する傾向」と定義し、さらに曖昧さへの耐性を「曖昧な事態を好ましいものとして知覚する傾向」と定義している。Budner はこれに基づき16項目か

らなる尺度を作成し、これ以後、曖昧性に対する耐性—非耐性は一次元連続体であるという前提で諸研究が行われている。

Frenkel-Brunswik (1949) は、曖昧さへの非耐性を精神分析の用語である両価的感情から着想を得、偏見等の背景と考慮しており、曖昧さへの非耐性の適用される人の範囲はかなり狭いと考えられる。そのため“脅威”を曖昧さに対する不耐性の背景要因とする考えた方はいり得たのであろう。しかし、曖昧さに対する耐性—非耐性をより一般化して私たちに適用して考えるようにするのであれば、「脅威」であるよりは冒頭で述べた「居心地の悪さや不快感」とすることが適切であると考えられる。

Budner (1962) 以降、曖昧さへの耐性があることは、対象や状況の曖昧さを好ましいものとして考えることが前提にされ、「脅威と覚える—脅威と覚えない」という連続体として考えられてきた。しかし、上で指摘したことから「居心地の悪さ・不快感を覚える—居心地の悪さ・不快感を覚えない」という一次元連続体上での「居心地の悪さ・不快感」を感じないことが曖昧さに対する耐性があるということになる。

さらにもう一つ考えておかななくてはならないことは、曖昧さを認知し、居心地の悪さや不快感（仮に脅威であっても）を覚えたとしても、それに対して対応したり、また影響を受けることなく過ごすことができるとすれば、これも曖昧さに対する耐性があると考えることができよう。つまり曖昧さに対する耐性には2つのタイプがあると考えられるのである。

曖昧さへの反応や対応の問題

曖昧な対象や状況に直面するとき私たちはどのように反応するかについて、耐性の低い人の反応を Budner (1962) は曖昧な事態への脅威に対する反応を服従と否認とに分けているが、Budner の作成した尺度の項目内容をみると、単純さや簡明さを好む傾向を表す内容の項目で構成され、曖昧さへの耐性を表す項目では、複雑さや独自性を好む傾向を表す内容が多いようであり、必ずしも曖昧さに対する耐性—非耐性を明確にするものようには思われない。

また、西村 (2007) は、曖昧さに対する耐性—非耐性の枠組みではなく、曖昧さへの態度として検討を行い、因子分析の結果、「曖昧さ享受」「曖昧さへの不安」「曖昧さの受容」「曖昧さの統制」そして「曖昧さの排除」の5因子を抽出している。曖昧さへの耐性—非耐性という二分法ではなく多面的網羅的に理解しようとする点は大変興味深いものである。

さらに別の視点で考えることもできる。木下 (1988) は、情報処理の観点を導入し、私たち人間が曖昧なさまざまな情報にどのように反応するかをまとめているが、その際に田中 (1980) の「あいまいさ」の3つのクラス分け、「複雑・多様性」、「不確実性」、「あいまい性」に基づいてこれを行っている。それぞれのクラスでの人間の反応について木下は以下のように述べている。「複雑・多様」な刺激への反応については、「情報の単純化」と「情報処理基準系の変更」を挙げている。さらに「情報の単純化」の中には「パターン分類」「不必要な情報の切り捨て」と「情報の再構造化」が含まれる。「不確実」な刺激に対する反応については、「内部刺激の発生」「情報処理基準系の変更」を、「あいまい」な刺激への反応については、「情報構成要素の整合性の回復」「刺激の再構造化」を挙げている。

これらのほかに私たちは日常生活の中で、曖昧な刺激や状況をそのままにしたり、やり過ごすこともしばしばあると考えられる。

これらは私たち人間が曖昧な刺激に直面した時に一般的に行うものとして示されているが、あ

る曖昧な対象や状況についてどの程度、居心地の悪さや不快さを感じているかや、曖昧さに対する耐性の程度や在り方によって用いる情報処理の方法が異なる可能性もあり、こうした観点からの実証的検討が望まれる。

さらなる課題

本稿では、紙幅の都合で検討することができなかったが、曖昧さに対する非耐性傾向の高い人のさらなる検討が考えられる。例えば、サブタイプとして曖昧な対象や状況に対する居心地の悪さや不快感の延長線上あると考えられる強い不安に縛られてしまい通常の活動が妨害されてしまう傾向などが想定される。

また曖昧さに対する耐性は認知スタイルであると考えられる立場（例えば、GoldsteinとBlackman, 1978）とそうでない立場（FurnhamとMark, 2013を参照）とがあるのでこれについても検討や確認が必要であると考えられる。

引用文献

- Budner, S. (1962) Intolerance of ambiguity as a personality variable. *Journal of Personality*, 30, 29-50.
- Ellsberg, D. (1961) Risk, ambiguity, and the Savage axioms. *Quarterly Journal of Economics*, 75, 643-669.
- Frenkel-Brunswik, E. (1948) A study of prejudice in children. *Human relations*, 1, 295-306.
- Frenkel-Brunswik, E. (1949) Intolerance of ambiguity as an emotional and perceptual personality variable. *Journal of Personality*, 18, 108-143.
- Furnham, A. & Ribchester, T. (1995) Tolerance of Ambiguity: A Review of the Concept, Its Measurement and Applications. *Current Psychology*, 14, 179-199.
- Furnham, A. & Marks, J. (2013) Tolerance of ambiguity: A review of the recent literature. *Psychology*, 4, 717-728.
- Goldstein, K. M. & Blackman (1978) Cognitive style: Five approaches and relevant research. John Wiley & Sons, Inc., New York (ゴールドシュタイン・K. M. ブラックマン, S., 島津一夫・水口禮治 (訳) (1982) 認知スタイル 誠心書房
- 木下富雄 (1988). あいまい刺激に対する人間の反応 繊維製品消費科学, 29, 469-478.
- 田中幸吉 (1980). 種々のあいまいさとその取り扱い 第1回あいまい科学研究会資料 (木下富雄 (1988) からの引用)
- McLain, D. L. (1993) The MSTAT-I: A new measure of an individual's tolerance for ambiguity. *Educational and Psychological Measurement*, 53, 183-189.
- 西村佐彩子 (2007). 曖昧さへの態度の多次元構造の検討—曖昧性耐性との比較を通して— パーソナリティ研究, 15, 183-194.
- Waite, M. (Ed) (2012) Paperback Oxford English Dictionary seventh edition. Oxford university press., Oxford.

